Osaka University Knowledge Archive

Title	大学から大学への挑戦
Author(s)	小林, 傳司
Citation	Communication-Design. 2007, 0, p. 13-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/11626
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

1. 大学から大学への挑戦　小林傳司

微妙な立ち位置 ――「内」の「外」

CSCD は日本の大学制度においては奇妙な組織といわざるを得ない。特定の学部・研究科に所属、内属せず、学生も所属していない。研究所でもなく、教育組織でもなく、その両方の機能を受け持つ。組織構成も、専任がいる（昨今の大学がおかれた状況で、センター組織に専任を置くことの難しさがいかほどのものか）上に、派遣教員、任期つき教員、兼任教員からなるという複雑さ。企業において、専任、派遣、パートが混在し、かつ仕事の内容が明確に階層化されず雇用形態と必ずしも対応し

ていないのと類似している。しかし、昨今の大学改革への企業的経営の影響を議論するのは後にしておこう。

…大学改革

CSCDの立ち位置の微妙さをもう少し続けてみよう。明確なミッションのもとに設立されてはいるが、ディシプリンは明確ではない。対外的に説明する際に、困惑することが多い理由でもある。対外的だけではなく、学内での説明も難しい。大学内の組織でありながら、大学の外にあるように感じることもある。少なくとも物理的には、現在のCSCDは大学のキャンパスにオフィスをもたないという意味で、鉢植え状態である。制度的にも学部・研究科と直接的な関係を持っていないという点で、大学の「外」、「コミュニケーションデザイン」という研究内容も従来のアカデミズムになかったという意味で大学の「外」と感じられる。

しかし、社会という大学の外部からみれば、CSCDはれっきとした大学の機関であり、大学の「内」である。大学の「内」のなかにある「外」という奇妙な立ち位置がCSCDの特色である。

「内」／「外」とメタ

私が最近、主たる研究領域としている科学技術社会論（STS）もCSCDに似た点がある。学問の分類はそれ自体が大きな問題ではあるが、一般に、文系と理系という区別がなされることが多い。理系と文系の区別は高校段階でまず振り分けられ、大学の学部選択においてほぼ確定する。もちろん文系といっても、人文系と社会科学系ではずいぶん異なるし、理系といっても、理学部と工学部、医学部ではずいぶん異なるが、案外そのことが無視されている。とは言え、科学技術社会論は理系と文系の区別で悩む分野である。文系からは、「科学技術」を扱っているために「外」の分野と思われがちである。他方、理系からは、「実験」をして知識を生産するというスタイルではないため、やはり「外」と思われがちである。科学技術社会論とは、現代社会における巨大な存在である「科学技術」と呼ばれる研究や学問とその成果を対象として、人文学的、社会科学的に分析・議論する分野なのである。

…科学技術社会論

…理系と文系

…科学技術

したがって、科学技術社会論は理系の人が思い描くような意味での「知識」を生み出しはしない。自然科学や技術が基本的に「自然」を対象として知識を生産し、社会科学が「社会」や「人間」を対象として知識を生産するのに対して、科学技術社会論は「科学技術」という学問を対象

…知識生産

としている点で、「メタ−学問」論の性格を備えている。つまり、通常の意味での自然を利用するための有用な知識や社会関係や人間関係の改善に資するような有用な知識を生み出しはしない。むしろ、科学技術やそれの社会との関係などについての既存のものの見方を「反省」し、「批判」し、新しいものの見方を提示する、つまり科学技術と社会の関係を眺める際の「補助線」を提示するといった役割が大きい分野である。実質的な知識を生み出さず、それに対する「反省」と「批判」を旨とする学的営みという点で「哲学」と類似した機能を持っている。科学技術社会論も一応は学問の「内」であるが、やっていることは既存の学問を「外」から眺めるという意味で、「内」の「外」という側面を持っていると言えよう。

反省と批判…

では、科学技術社会論は「実質的な知識」を一切生み出さないか、といえば、そうでもない。社会の中での科学技術の作動に関して改善すべき点を指摘し、その方策を提案することも可能であろう。広い意味で「政策的知識」とでも呼べる「実質的な知識」を生み出すことは可能なのである。

政策的知識…

コミュニケーションデザイン「論」はどうなのであろうか。コミュニケーションデザイン「論」は「論」である限りにおいて、単なるコミュニケーションの実践ではないであろう。

コミュニケーション…デザイン「論」

ある論考でコミュニケーションデザイン・センターの設立の趣旨を説明した際、次のように記したことがある。

> ［設立の狙いの一つは］コミュニケーションデザインの研究である。現代社会は、20世紀以来、大量の知識生産を行い、それを社会的活動に利用してきた。このことは当然、社会活動の様態の変化をもたらさざるを得なかった。知識生産とその習得のために教育期間の延長が必要となり、高等教育への進学者は増加した。また、大量の知識生産により、個々人の習得できる知識量を上回る知識が社会に流通することにより、比較的狭い領域の知識に通じた「専門家」が多数出現し、こういった人々の専門的知識に社会運営は依存することになっていった。当初、このような事態は、急増する知識については教育を通じての普及啓蒙と専門家による知的分業によって対応可能と考えられていた。
>
> しかし、先進国を中心として、20世紀末に生じたのは、専門家の

専門家による知的分業…

知識と専門家ならざる人々の知識との「非対称性」の劇的昂進、大量の専門知に依存した社会運営から生じる思わぬ事態や事故の出現に伴う、専門家不信や社会的紛争であった。ここで問題になっているのは、知識の生産ではなく、知識の流通と消費の場面に生じているトラブルである。これを「コミュニケーション」という視点から考察し、知識の流通と消費をよりよい形態へと「デザイン」することを目指すというのが、センター設立の趣旨の１つなのである。従来、大学は知識の生産の場面に力点を置く組織であったが、知識の流通と消費の場面に焦点を絞ることを目指す点において、コミュニケーションデザイン・センターは大学の社会的機能に、新たな１ページを付け加えるものなのである。

…知識の流通と消費

…大学の社会的機能

ここでは、知識の「生産」ではなく「流通」と「消費」の場面におけるデザインが、コミュニケーションデザイン研究の目的であると説明されている。つまり、現実のコミュニケーション実践を「対象」としているという点でメタ的である。コミュニケーションデザインを考えるということは、ひたすらコミュニケーション実践を行う（イベント屋）ことではなく、コミュニケーションのあり方のデザイン＝設計に力点をおくことであり、そこにはおのずから反省的、批判的視点がつきまとうのである。

…コミュニケーション実践

…コミュニケーションのあり方のデザイン＝設計

コミュニケーションデザインの知

もとより、イベントを実践する人々もそのイベントのあり方についての反省的、批判的視点を持つ。そしてさまざまな経験を通じて、独自のわざや知恵を身につけていくのは当然である。では、コミュニケーションデザイン研究とどこが違うのか。おそらく、そのような経験を通じて得られた独自のわざや知恵（体験知）を、収集し、整理し、分析し、可能であれば体系化するといった作業を自覚的に遂行するか否かという点が異なるのであろう。しかも、CSCDの構成からわかるように、分野を横断した形でこの種の体験知を分析する点が、個別のイベント経験にもとづく体験知と異なるのである。

…わざと知恵・体験知

しかし、対象とするコミュニケーション自体が極めて多様なため、その「設計」も多様にならざるを得ない。ミクロにみれば、あるコミュニケーションの場、例えば会議やワークショップにおけるプレゼンテーションやア

…コミュニケーションの場

イスブレーキングの「手法」も設計の対象となる。机の形状、配置、議論の段取り、使用するツール、ファシリテーターの技などもそうである。

ワークショップ手法…

メゾのレベルでは、多様なワークショップ手法の開発や、電子会議室などの設計など、目的にふさわしいコミュニケーションの場の創出もコミュニケーションデザインに含まれよう。

さらにマクロに見れば、社会的に紛争が生じるような場面、例えば原子力問題や医療問題などにおいて、紛争解決のため、あるいは紛争未然防止のために、どのようなコミュニケーション構造が社会の中に準備されるべきか、といった問いもコミュニケーションデザインの研究対象である。民主主義という政治体制自体が、ある意味で、社会のコミュニケーションデザインの一つなのである。

大学の歴史、そしてCSCD

国立大学が法人化するなど、ここ10年、大学改革が叫ばれて久しい。企業や行政出身者の大学教員任用、任期制導入、競争的資金の増加、COE選定、産学連携の推進などさまざまな変化も生じている。その流れのなかで、CSCDは生まれた。この流れをどう解釈するかによって、この流れに「抗して」生まれたのか、「掉さして」生まれたのかが決まるであろう。

冒頭で、大学が企業経営の論理に影響されているということを指摘したことを思い出そう。確かにこのような傾向には、従来の大学の運営の慣習からみて、大きな違和感を覚えることも多い。そしてこの傾向に異議を申し立てる言説もかなり存在している。しかしここではこのような議論とは別の視点を出してみたい。

大学…

中世大学…

それは、大学の内と外という議論に関わる。大学とは13世紀頃に中世大学として神学、法学、医学というプロフェッション養成の学部と哲学部という構成で出発したことは周知のとおりである。しかし大学はその後、時代の変化に応じてさまざまに変容してきた。今われわれが文学部の名の下にイメージする人文学も、当初は大学の中にはなかった分野である。ルネッサンス時代、神学中心の大学人に対して、人文主義者たちはギリシャ・ローマの古典をもとに人間性の解明を試みたが、彼らの活動の場は大学の中というよりはむしろ、大学の外の都市空間であり、教皇や都市の政府に仕えていた。レオナルドに象徴されるように、人文主義と芸

術の交流も都市空間や宮廷で生じたのである。当然のことながら、この時期の芸術は職人的活動であり、人文学と芸術と技術は大学の外で、密接な交流を繰り返したのである。ガリレオ自身が職人から多くを学んだと言明していることも、ここに付け加えておくべきであろう。

…人文学・芸術・技術

大航海時代を経験し、商人の視野の拡大や未知の世界の情報の流通に刺激され、職人の世界と学問の世界が交流し始めることを通じて、大学の外で人文学は生まれたのである。しかし、大学はしたたかな装置であった。いつの間にか大学はこの人文学を自らの内に取り込んでしまったのである。

事情は科学においても同様である。16世紀、17世紀において科学は大学の外で営まれる好事家の活動に近いものであった。ロイヤルソサイエティに集った人々は、実験を通じての知識生産という活動が「まともな」活動であることを社会に訴えるために、公開実験を繰り広げたのであった。しかし、この活動も19世紀になると大学に入り込み始める。

工学も例外ではない。中世大学の伝統の強いヨーロッパでは、工学は大学になじまぬものというイメージがつきまとっており、大学の外の教育機関で教えられていた。フランスではエコル・ポリテクニク、そしてドイツではTH（Technischer Hochshule）がその例である。大学に工学を組み込んだ最初の事例は明治日本の東京大学と言われている。もちろん、今や大学における工学の地位は揺るぎ無きものとなっている。

ここで注目したいのは、大学の柔軟性である。大学は大学の外の活動に対して、ある意味で受身で対応してきた。保守的といってもよい。しかし、時間はかかるにせよ、大学の外に生まれた活動を内に取り込み、自らの中心的活動として位置づけてきたのである。仮にこの大学の外で生まれた活動を「社会的ニーズ」と読み替えるなら、大学は、それが何であれ、「社会的ニーズ」なるものを学問の伝統のもとで、学問的に加工された形で取り込んできたという歴史を持つのである。

…大学の柔軟性

…社会的ニーズ

こう考えると、CSCDの立ち位置の微妙さについても、新しい視点で考えることができるであろう。確かに昨今の大学改革は企業的経営に影響を受けている。社会人を教員として採用することも増えている。これは資本主義の進行に伴う大学の解体と変質の前触れと言いたくなる気持ちもわからぬわけではない。しかし同時に、これは大学の外の活動に対して大学がどう反応するかという問題であり、今見たように、大学は保守的にこれに対応し取り込んできた歴史を持っている。

CSCDもこのような視点から見ると面白い存在なのである。劇作家、デザイナー、アーティスト、プロデューサーなど多様な社会経験のある人々を取り込むアンテナショップに見えなくもない。明らかに、大学の外で起こっている多様な活動（企業経営だけではないのだ、大学の外で起こっていることは）を、もたもたと不器用に取り込もうとする試みとしてのCSCD。NPO活動や市民参加を求める活動など従来の大学が正面から取り組んでこなかったものへのまなざし、こういった視点から見ると、CSCDはある意味でわかりやすいと言えないだろうか。

とは言え、大学は保守的な装置なのである。さらに偽悪的に言えば、大学は、ある意味で社会に野放しにできない人々の収容装置かもしれない。しかし、知的伝統の継承と言う点では、かなり優れた装置でもあった。知的生産に関してもかなり優れている。CSCDがなかなか認知されないことは、ある意味で必然なのかもしれない。1998年にコンセンサス会議に取り組んだ頃、社会も学界も冷ややかなものであった。しかしやっているわれわれ自身には、ある種の高揚感があった。これは絶対に大切で、こういうものを考えていかなくてはならないはずだと思っていた。そしてコンセンサス会議を実施したとき、参加した人々がこういうものをもっとやるべきだと口をそろえて言ったものである。それから数年で、コンセンサス会議への社会の注目は激変した。CSCDの活動だって、数年立てば、いや数十年かもしれないが、大学の中で当たり前の活動になっているかもしれないのである。かつての人文学、科学、工学のように。

そうは言いつつも、大学しか知らない人間として、あえてこう言っておきたい。大学が取り組むべき重要な事柄の一つは、社会における主流の考え方や思想が社会のさまざまな歴史的要因や力関係によって変化し得るものだという認識のもとに、現在主流ではなく、また社会から認知されていないような声を常に聞き取ろうとする感受性を育てることなのである。言いかえれば、専門性あるいは古典を緩やかに改訂しつづける感受性の養成である。大学の機能とは、社会的ニーズと専門性や古典とを媒介（intermediate）することなのである、と。

知的伝統の継承…

コンセンサス会議…

専門性・古典…

感受性の養成…

媒介…